

A Living God

—小泉八雲と稲むらの火—

高倉 克也



小泉八雲

小泉八雲ことラフカディオ・ハーン(1850-1904)はイギリス領だったギリシャのレフカダ島でアイルランド人の軍医の父とギリシャ人の母のもとで生まれた。幼少時代をダブリンで過ごし、父の死後20歳で渡米してからはジャーナリストとして活躍した。1890年、40歳で出版社の通信員として来日し、島根県松江市で英語教師を務め、翌年に松江士族の娘・小泉節子と結婚。1896年に東京帝国大学の英文学講師となって帰化し、小泉八雲と名乗った。欧米に日本文化を紹介する著作を数多く遺し、とくに雪女、むじな、耳なし芳一の話などの『怪談』で有名だ。

津波から村人を救った物語

1896年に小泉八雲が英語で書いた「A Living God」(生ける神)は翌年ボストンとロンドンで同時出版された『仏陀の国の落穂』という短編集に収められている。1854年(安政元年)の安政南海地震における故事に基づいた物語だ。

あらすじを紹介すると、紀伊の国広村(和歌山

県有田郡広川町)の高台に住む村長の浜口五兵衛は地震のあと沖合の波が退いていくのを見て津波の発生を予感する。しかし秋祭りの準備に追われている400人もの村人たちに危険を告げ知らせる時間的余裕はない。そこで五兵衛は自分の田んぼで刈り取ったばかりの稲の束=稲むらにたいまつで火をつける。火事だと思って高台に駆けつけた村人たちはやがて眼下に巨大な津波が襲ってくるのを見る。五兵衛の自己犠牲的行為によって村人たちは命を救われたのだ。村人たちはそれから彼を「生き神さま」として慕うようになる。

この物語を読んで感動した地元の小学校教員の中井常蔵は児童向けに原作を再構成し、1934年(昭和9年)の文部省国定国語教科書の教材公募に「燃ゆる稲むら」と題して応募した。入選した作品は1937年(昭和12年)から1947年(昭和22年)まで尋常小学校用の国語教材として採用され、「稲むらの火」というタイトルで広く知られるようになる。

東日本大震災が発生した2011年度から「稲むらの火」はふたたび小学校の教科書に掲載されることになった。

私財を投じて堤防を築く

主人公の五兵衛のモデルとなったのは紀州、総州(千葉県銚子市)、江戸などで手広く醤油製造業を営んでいた濱口家(ヤマサ醤油)7代目当主の

濱口儀兵衛(1820-1866)だ。洋学の第一人者である佐久間象山に学んだ儀兵衛は勝海舟や福沢諭吉らと親交を結び、私財を投じて耐久社や共立学舎という学校を設立するなど聡明で慈善事業に熱心な人物だった。1854年の地震発生当時、実際はまだ34歳の若さで仮設住宅の建設や農漁具の調達などの復興活動に奔走した。

とりわけ翌年から4年の歳月をかけて延べ5万7千人、銀94貫の私財を費やして全長600m・幅20m・高さ5mの広村堤防を築いたことは特筆に値する。これは津波で職を失った人々の失業対策となり、1946年(昭和21年)に発生した南海地震による津波から住民を守ることになった。広川堤防は現在でも広川町に史跡として残され、毎年11月に儀兵衛を讃えた感恩碑のまえで津浪祭が開かれているという。



広川庁舎・稲むらの火広場に立つ銅像

このほか儀兵衛は1858年(安政5年)、江戸の西洋医学所が火災で損壊したときに700両を寄付して再建し、現在の東京大学医学部の基礎をつくった。後年になって濱口梧陵を名乗り、明治新政府で大参事、初代和歌山県議会議長、初代駒通頭(郵政大臣)などの要職を務めている。

史実を甦らす想像力

小泉八雲の「A Living God」では儀兵衛=五兵衛は10歳になる孫のいる老人と設定されている。

人物像が史実と異なっているという指摘はあまり意味がない。この物語もまた『怪談』などと同様に『雨月物語』や『今昔物語』を題材とした再話文学の流れのなかに位置づけるべきだろう。

儀兵衛=五兵衛が稲むらに火をつける場面などを讀むと、彼の自己犠牲的行為はまさに小泉八雲の卓越した文学的想像力によって甦ったといっている。

「少年がすぐに一本の松^{たいまつ}明に火をつけると老人はそれを持って田へ飛び出した。そこには彼が注ぎ込んだ資本の大部分を意味する何百もの稲むらが、納屋に運び込まれるばかりになって並んでいた。彼は斜面の縁に一番近いところにある稲むらに近づくと、それに松明で火をつけ始めた。その年老いた手足で精一杯すばやく体を動かしながら次から次へと火をつけて走った」

また津波が襲ってくる場面はまるで村人たちと同化したようにその妻まじい模様を伝えている。

「『津波だ!』人々は口々に叫んだ。しかしその後すぐに、いかなる雷も及ばないくらい強烈で言い表しようもない衝撃でどんな叫び声も物音もかき消され、耳まで聞こえなくなったほどであった・巨大なうねりが怒涛のように陸に押し寄せ、その海水の重みで山々はとどろき、一面稲光のような白い泡で包まれていた。そして一瞬、斜面を雲みたい^いに這い上がってくる嵐のような水煙りのほかには何も見えなくなった」

小泉八雲の迫真の描写によって人々は津波の恐ろしさを知り、災害から命を守ることの大切さを学んでいくことができるだろう。

日本語の読めない小泉八雲のために妻の節子は普段から各地の民話や伝説を収集して語り聞かせたという。また近隣の住民や旅先で出会った人々の話も彼の創作意欲を刺激した。

小泉八雲は日本の文化・習俗・民衆を誰よりも深く学び、理解し、愛そうとした。そのもっとも美しい結晶が「A Living God」だったという気がする。